
デーモンハンター 鬼の姫巫女

S・HUNTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デーモンハンター 鬼の姫巫女

【Nコード】

N5603Z

【作者名】

S・HUNTER

【あらすじ】

美崎祐騎は デーモン・ハンター と呼ばれる存在になって、まだ一年に満たない経験の浅い新人であった。しかし、彼は6年前に開花した能力を生かし、ベテランハンターでさえも手を焼く、擬装者 と呼ばれるデーモン専門のハンターとして活躍していた。最近になって、札幌市内で連続して、女子高校生ばかりが惨殺される事件が起きていた。彼女達は血を吸い尽くされ、更にその中の数名の遺体は、無残にも食い荒らされていたのだ。

そしてその犯人とされる デーモン を探し出し、滅ぼすと言う依

頼を受けた祐騎と仲間達は、各々の特殊能力を生かし、それがエルネージェ女伯爵 と呼ばれる、強大な力を持つヴァンパイアである事を突き止めた。

そんなある日、所長の水城が、桐生憂姫と言う一人の少女を連れてきた。両親をデーモンに惨殺された彼女は、特殊な能力者 である、

闇の種族 ダーク・レイス の能力を大きく増大させる力を持っていると言うのだ。

エルネージェ女伯爵 の犯行は、彼女を狙ったものだと言われている、祐騎にその少女、桐生憂姫の護衛を命じた。

一章

緑色に輝くデジタル時計は、すでに午前十二時から二十分ほど過ぎた事を表示していた。

ぼくは苛々しながらも、愛車である黒のレガシィ・ワゴンの運転席でじっと待っていたが、もう限界である。明日は午前中、早めの講義が予定されているのだ。

どうせ あの男 はもう、今夜はここから出て来ないだろう。いや、来なくてもいいとぼくは思った。今夜は早く帰ってベッドの上に倒れこんでしまいたい。その為にはこのまま、あの扉から あの男 が出て来ることなく、どこにも行かないで欲しい。せめてぼくがここを離れる十分ほどの間だけ……。

胸ポケットの携帯電話が着信のメロディを奏でた。バッハの G 線上のアリア だった。ぼくは期待と不安の混じりあった思いで電話を取った。

「おれだ。 ターゲット は店を出るぞ」

店の中に潜んでいる水城の声だった。もちろん、この着メロが鳴るという事は水城からのコールであるのはわかっていいるのだが、それでも彼の口からは違う言葉を聞きたかった。『今日は引き上げよう』と言う、昨夜まで三日連続で聞いていた言葉を……。

「 わかったよ。これから追跡する」

ぼくはそう答えて電話を切った。そして車のエンジンをかけて、道路の向こう側に建っている、古びたビルの正面の扉を見つめた。ぼくたちの目標である、あの男がそこから出てくるのを待つ為に……。

数分の後に、あの男が一人の女を連れて、汚れて曇ったガラスの扉を抜けてきた。

男は金色に染めた短い髪で、いくつものリングを耳に通した若い男で、肩幅の広い大柄な男だった。連れの女は明るい茶色の、シャギーを入れた肩までの髪で、派手なメイクをしたまだ十代だろうと思われる若い娘であった。二人とも酒かドラッグに酔っているようだ。少なくとも目に見える様子ではだが……。

ぼくには男が本当の意味では酔っていない事がわかっていて。彼はけっして酔う事など出来ないのだ。少なくとも人間の酒やドラッグでは。

男はすでに人間では無い存在なのだ。その心を覗く事により、ぼくは男が闇の種族である事を、今はっきりと確認した。これがぼくのひとつめの任務だった。

男は女を支えながら、路上に駐車してある一台のセダンに近づいた。真っ黒いシールドをウィンドウのすべてに張っている、メタリック・ブラックのマジェスタだった。

国産ではあるが、大型の高級車の中に連れの女を押し込むと、男は素早く運転席のシートに乗り込んだ。そしてそこからゆっくりとマジェスタを発進させると、大きな通りを右に曲がって行った。ぼくもその後を追う為に、レガシイのアクセルを踏んだ。

間に数台の車を挟み、百メートルほどの距離を置いて追いかけた。男が追跡に気づく事は無いだろう。そしてぼくが男の車を見失う恐れは無い。ぼくは男の意識を認識しているから、たとえ数キロ離れていても、男を見失う事は無い。それがぼく的能力なのだ。

ぼくは 擬装者 と呼ばれる存在を感知する事が出来る。そしてその 擬装者 の存在を認識し、精神的な、一種の『絆』を結ぶ事によって、彼らの意識を探る事が可能なのだ。こんな能力が欲しいと思った事は無かったのに……。

擬装者 とはその名の通り、人間の姿に偽装している デーモンの総称である。

男の車はやがて、豊平川の河川敷に降りて行く道に入っていた。すぐに後を追う事はしないで、十分ほど遅れてその道に侵入し、暗い河川敷の駐車場に辿り着いた。そこには黒のマジェスタは停まっていなかった。アベックを乗せた一台のシルビアが停まっているだけだ。ぼくはアベックの邪魔をしないように、駐車場の端に車を停め、エンジンを切った車中で男の意識を感じる事に集中する。

すぐに男の存在を感知できた。ここからは遠いし暗いので、肉眼では確認できなかったが、彼は橋の下影に車を停めているらしい。あの女も一緒のようだ。

ぼくはレガシイの中で、腰のエイカー社製ホルスターに納まっている、1911・ガバメント・モデルをカスタマイズした、45口径オートマチックを引っこ抜いた。

ウィルソン社のカスタムであるその1911は、フレーム部をステンレスの地肌のままで、スライド部のみを真つ黒いテフロン・コーティングで表面処理されていた。もちろん、光の反射を抑える為である。

ノバックタイプの堅牢で引つ掛かりの少ない照準システムは非常に見やすく、暗闇でも自然発光する微弱な放射性物質であるトリチウムを使用した、ナイト・サイト・システムだ。暗い場所を使用する機会が多いこの銃には、無くてはならないものだと思う。

ぼくはパックマイヤー社のラバーグリップを右手で握り、左手でスライド先端に刻んであるセレーションを掴んで、ゆっくりと少しだけ引いた。微かな金属音をたてて、ロックされている銃身が結合を解き、排莢不良を防ぐために大きく抉られた排莢口から、銀色に輝く莢莢が覗いていた。

ぼくが携帯している拳銃は、いつでも即座に発射出来るように、薬室の中に実包を装着している。それが危険とは思っていない。そんな事よりも、いざと言うときに弾の出ない銃を握っている事の方が恐ろしい事態を招くのだ。それにそんな事で暴発するような安物は、ぼくの所持している拳銃には一丁も無いのだ。

それでもぼくは、最後にそれを確認する作業を忘れない。生き残る為には、常に確認を怠らず、慎重に行動しなければならないからだ。

この1911カスタムには、莢莢の容量ぎりぎりに火薬を装着した強装弾が、ステンレス製の弾倉に八発、そして薬室に一発の合計九発が装填されている。その強化された45ACP実包の弾頭は、銀をアルミニウム・ジャケットで包んだ特製のものである。しかも先に大きな孔が開いた、ダムダム弾の一種であるホロー・ポイントと呼ばれる形状をしていた。傷口を大きくし、体の中をめちやくちゃ

に引き裂いていく恐ろしい弾頭だ。擬装者を即死させる為に造り上げた特殊な弾丸だった。

アルミニウムを銀にジャケットしている理由は、低温で溶解する純銀のままでは、とけた銀が銃身に付着する恐れがあるので、プレッシャーの高い強装弾を作れないからだろう。

この銀を核に持つ弾丸を撃ち込まれた擬装者、闇の種族と呼ばれるヴァンパイアどもは、その強力な治癒力を発揮する事が出来ず、致命的な一撃を受けて絶命に至る。もちろん、脳や心臓、脊髄と言った身体の重要な部位を撃ち碎けば、不死の肉体を持つ闇の種族 といえども死に至るのだ。

それならば高価な銀の弾丸など必要ないと言えるのだが、ぼくは水城の指示通りに、この銀製弾丸を使用している。水城曰く、『命より高いものでは無い』のだから……。

要するに銀の弾丸はプラスの保険のようなものだ。喻え急所を外し、その場で倒れる事がなくとも、闇の種族にとっては即効性の猛毒である銀が、奴らの身体を急激に蝕んでいき、癒える事ないその傷の為に真実の死に至るのだから……。ぼくはその凶暴な愛銃に、親指で安全装置を掛けると、もう一度ホルスターにそれを戻した。そしてゆっくりとした動作で車から降り、アイボリー色の麻混のジャケットを羽織ると、遠くに見える橋の下に向かって歩き出した。次の仕事を果たす為に……。

あの男 が居るであろうその橋の下は、影が濃くなっていて真っ暗だった。数十メートル上の方は街灯と車のヘッドライトによって眩しいくらいに明るいのだが、その光によって創られたその影は、いつそう陰影を濃くしていたのだった。

ぼくはゆったりとした歩調でその影に近づいた。橋の上を疾走する車の走行音が、やけに耳障りだった。心臓は早鐘を打ち、興奮と不安によって口の中が乾いているのが妙に意識されていた。何度もこんなシチュエーションを迎えて来たが、まったく恐怖が無くなる事は無いだろう。なにせ血に餓えた猛獣をたった独りで、その体臭を嗅げるほどの至近距離で仕留めなければならぬのだ。しかも、その相手は人間の知恵と罠の勢力を備えているのだから、取っ組み合いになったら、ぼくのような人間 身長百七十センチ、体重六十キロと言う決して恵まれている肉体ではない など、簡単に引き裂かれてしまう。

嫌だなあ ぼくはこの仕事に失敗し、獲物たる 闇の種族 のヴァンパイアに反対に引き裂かれる自分の姿を想像し、心底この仕事を止めようかと思った。こんな事はもう止めて、さっさと自分の家に戻り、明日の朝早い講義の為に熟睡したいと言う欲求に満たされる。

しかし……。

そんな事を考えているうちに、もうぼくは橋の影がつくる闇の中に入ってしまった。マジエスタは影に同化していて、すぐそこに停めてあると言うのに、それを認識するまでに少し時間が掛かった。

慌てて精神の『絆』を確認した。車の中にはその存在が感じられなかった。すると思ったより近くにその存在が確認された。男はぼくに気づいてはいるが、特に気にしている様子は無かった。先程の娘と激しく抱き合っているようだ。ぼくは無視されたのだ。

ぼくは視線を辺りにさまよわせるふりをして、なるべく視界の端で彼らの行為を盗み見た。草叢の中に二人は寝転がるようにして、半裸の状態で絡み合っている。ぼくが立っているアスファルトの遊歩道から十メートルも離れていない。

ぼくはその場から動く事なく、ちらちらと横目でその行為を盗み見ていた。偶然通りかかった振りをして、思わぬものを見てしまった為に啞然として立ち竦んでいる、そんな風を装っているのだ。

男はぼくが動かないのに気づいて、苛々した感情の波動を放射してきた。ぼくの存在を不安に思うのではなく、ただ邪魔に感じているだけなのだ。それがおおきな間違いである事を、ぼくは大声で言うてやりたくなった。

男は裸の上半身を起こしながら、暗闇の中ではつきりとぼくを見つめて、唸るような声を発した。

「なんだ、てめえ？ 見せもんじゃねえぞ！ さつさとどっかにいっちなまえ！」

ちんぴらのような脅し文句に、ぼくは思わず微笑みなくなった。どうしてこう言う輩は、闇の種族に転化してさえもこのような存在でいられるのだろうか？

それは、ヴァンパイアが人間から派生するものだと言う証拠なの

だろうか？

「うるさい。そんなのおまえの知った事じゃない。こんな所でいちやいやしているおまえが悪いんだろう？ そっちが消えるよ」

ぼくは嘲笑うような感じで、にやにやとしながらそう言った。男を挑発して娘から引き離す為だった。そしてそれは、ぼくの本心からの言葉だった。

「なんだとてめえ！」

頭の悪そうな男は、素早く娘から身を解き、草叢の上に立ち上がった。歯を剥き出しにして威嚇の表情を浮かべているので、鋭く尖った、人間のそれとは比較にならぬ長さを持った犬歯が、薄闇の中で鈍く光っていた。

茶髪の娘も身を起こし、何も着けていない白い胸を隠そうともせず、とろんとした目をこちらに向け、

「早くそんな奴、ぶちのめして追い払ってよう」

と、囃したてた。

こんな娘を救う為に、ぼくはこんな所にいるのだと思うと、正直言って腹立たしかった。男が食餌を済ませるまで待っていれば良かったと、心底悔やんでしまった。それでも見殺しにする事は出来ないのだから、まあ、仕方ないだろう。

ぼくは少しずつ移動して、男が少しでも明るい所に出てくるよう

に誘った。もつと自分に近づいてくるのを待った。少しでも命中率を高くする為だった。

ぼくは一撃でこの男を、まだ『若い』生まれたばかりの 闇の種族 を倒したかった。頭を一発で吹き飛ばすつもりだったから、確実に命中させる為に明るい場所に出て欲しかったのだ。もし外したのなら、次の瞬間にぼくはずたずたにされるだろう。

男は興奮しているのか、異常に発達した乱杭歯を剥きだしにしてぼくを追って来た。決して速い動きではない。しかしぼくが、自分を滅ぼす事の出来る武器を持っている事を、そしてそれを完璧に使いこなしている事に気づけば、彼は真の姿を曝け出し、人間の数倍の速さで襲い掛かってくるだろう事は間違いない。

橋の灯かりで映されたその顔は、はつきりと男がヴァンパイアである事を示していた。

金色に光る瞳、鋭く尖った二本の長い犬歯、突き出された両手の長い爪。それらは彼が 闇の種族 である証明だった。

ぼくは少しだけ恐怖を感じたが、それを無理やりに押し殺した。自己暗示の強いものを自分自身にかけたのだ。これで恐怖に身を竦める事はなくなる。

これもぼくを、 擬装者 専門のハンターとしている能力だった。

ヴァンパイアの視線には人の心を支配し、操る事の出来る魔力があるとされている。それはある種の催眠能力とされていて、ヴァ

ンパイアと呼ばれる 闇の種族 が恐れられている理由の一つであった。つまり、普通のハンターならば引き金を引く事も出来なくなってしまうと言う事である。

そしてそれは、確実な死を約束するのだ。

ぼくは男が投げつけてきた恐怖を振り払うと、平然と男を睨み返した。男の瞳に逡巡の色を見たのはぼくの勘違いだろうか？ いや、男は確実に狼狽している。その証拠に、その場に足を止めたではないか。躊躇うように、男は動きを止めたのだ。

ぼくはその隙を見逃さなかった。ジャケットの裾を払うようにして、ぼくは腰のホルスターから45口径オートマチックを引き抜き、男の鼻梁にその銃口を向けた。トリチウムの光る点が、はつきりとその照準を際立たせていた。

安全装置は銃口を向けた時点で解除されている。後は引き金を絞り落とすだけで、マグナム弾並みのエネルギーを秘めた、強力な特殊銀弾が、男の頭を吹き飛ばすだろう。

ぼくは自分の頬が歪んでいくのを感じた。笑っているのだ、ぼくは。

押さえよしの無い歓喜がぼくの心に湧き上がっていた。

男が恐怖を覚えている事をぼくは感じ取っていた。 闇の種族の末席に連なってから、恐らく初めての事であろう。

心地よい優越感を感じながら、ぼくは引き金を引いた。

闇の種族　として生き返ったはずの男は、血と脳漿を撒き散らし、
またもや死に神に捕まってしまった。もう決して蘇る事の無い、完
全な　死　へと旅立って行ったのだ。

ぼくは45オートを右手に、だらりと下げたまま、茶髪の娘を見
た。

娘は呆然として、ぼくの顔を見つめている。知性の欠片も感じさ
せないその表情に、ぼくは何故だか激しい怒りを感じた　　まだ殺
戮への興奮が冷めやらない。

ぼくはゆっくりと45オートを持ち上げ、娘の胸に銃口を向けた。
唇の端が、歪んだ笑い作っているのに気づいていた。引き金を徐々
に力が加わっていく。

「おい、もう終わったんだぞ。さっさと銃をしまえ」

背後から響いたその声に、ぼくははっとして振り向いた。水城が
ダーク・スーツのスボンのポケットに両手をつっ込み、数メートル
離れた背後に立っていた。

ぼくは内心動揺していたが、「わかってるよ。女がヴァンパイア
に転化したかも知れないから、用心の為に狙いをつけただけさ。撃
つ気は無かったんだ」と、平然とした表情を浮かべようと努力した。

もちろんそれは嘘である。

水城は片方の眉を器用に上げながら、わざとらしく肩を竦めた。

「まあ、おまえがそう言うならそれでいいさ。取りあえず、警察もおっつけ来るだろうから、状況説明をきっちりやってくれよ」

「マジかよ？　ちえっ、また睡眠不足になっちまう」

水城は多くの殺人衝動に気づいたようだったが、それを見逃してくれたようだ。ぼくは睡眠不足の不満を水城に言っ、その所為で過剰な防衛反応をしたのだと思わせる。

もつともそれを信じる水城ではない。水城の心が読めない事が、こう言う時ほど悔しく思える。普段はけっして、そんな事を思いもしないが……。

「さて、写真を撮るとするか」

そう言っ、水城はデジタルカメラを取り出し、頭の半分を吹き飛ばされた、ヴァンパイアの死体に近づいて行っ。今は怯えて、擦れた声で嚙り泣きながら震えている、茶髪の娘には一瞥もくれない。

相変わらず冷たい奴だ。自分の事を棚に上げてぼくはそう思っ。さっきはその娘を射殺しようと思ったと言っのに……。

ただ、ぼくがああ娘　今は憐れにも思っ　を射殺したい感情を覚えたのは、ああ娘がぼくに対して一瞬、強い憎しみの念を放射したからなのだ。落ち着いて考えてみれば、目の前でぼくに恋人

そう呼ぶには短い付き合いであろうが　　を射殺されたのだから仕方ないのだろとも思う。

しかし、自己暗示をかけている戦闘中のぼくには、そんな事を考える余裕など無い。ぼくに対して敵意や悪意を放射した者はすべて抹殺するべき敵なのだから……。

その状態のぼくを、　バーサーカー　と水城は呼んでいた。殺戮の快感に身を浸している、無差別に敵を求める狂戦士のようなと。

いいじゃないかそれでも。そうしていれば、取りあえず生き残れるのだから……。

ぼくは自分の能力の中で、これだけは持っていて良かったと思っているのだ。

フラッシュを何度も光らせて、一心に記録写真を取っている水城に近づき、倒れている男の死体をゆっくりと見た。徐々にその身体は溶けて、白い骨を剥き出しにしていた。酷い腐臭が辺りに立ち込めている。

これが　闇の種族　の末路なのだ。

彼らヴァンパイアは、真の死を迎えると肉体を維持する事が出来ず、
急激に腐敗し、白骨だけになってしまう。数百年を生きてきた　貴^{エル}族^{ダイ}　クラスならば、灰しか残らない場合も多いと言われる。

ぼくは自分が滅ぼした、ヴァンパイアの成れの果てから目を逸らした。別に気分が悪くなったとか、良心の呵責に耐えかねてと言った事ではなく、単純に飽きたからだった。その事で放っておかれた茶髪の娘が視界に入った。

彼女は凍りついたように固まっている。呼吸さえも忘れていないのだろうか？白い肌を露出したまま、そのまま座り込んでぼくを見ている。

晩夏と言うよりも秋に近いこの時期の、冷たくなった風を受け、その肌には鳥肌が立っているのだが、彼女にはそんな寒ささえも感じられていない。

心の中が空っぽになっているのだ。

ぼくは暫くの間迷っていたが、軽く溜め息をついて、娘に向かってゆっくりと歩いていった。本当は面倒臭かったのだが、このまま放置しておけば、彼女は確実に狂ってしまうだろう。せつかくヴァンパイアの魔の手から逃れたのに……。

ぼくが目の前に立っても、彼女は空虚な眼差しでぼくを見る事しかない。いや、正確には、ぼくの姿さえも見えていないのだ。彼女の精神は完全に闇の中に蹲っていた。

ぼくは彼女の頬を両手で挟み、その焦点の定まらぬ瞳を覗いた。そしてぼくは彼女の心に来るだけ優しく触れた。彼女は一瞬だけ恐怖の色を瞳に浮かべ、そして気を失った。

ぼくは崩れ落ちる彼女を受け止め、ゆっくりとその草叢に横たえて、肩から落ちているその着衣をおざなりにでも直してやった。

これで彼女は、彼岸の向こうから戻って来られるだろう。

「ふん。今日は優しいな？」水城がぼくの後ろでそう言った。

「別に　ただのアフターサービスさ」

と、言い捨ててぼくは立ち上がり、

「もういいだろう？　これから取り調べ何て受けたくないよ。ぼくは帰るぞ」

と、水城に向かって厭味ったらしく文句をつけた。

水城は肩を竦め、背を向けながら右手を上げて軽く振った。そして先程の屍骸の元へ戻っていく。警察の到着を待つのだろう。そして契約を果たした証拠の写真を手渡すのだ。

ぼくは彼に背を向けて、駐車場に向かって歩き出した。草叢に横たえた娘にも、二度と視線を戻す事なく……。

後始末は警察の仕事だ。ぼくがいなくとも、警察には水城が色々説明するだろう。

ぼくは早く帰って眠りたかった。

迎えてくれる者のいない我が家に入り、暗い居間の明かりを灯す。大きなバッグを床に放り出し、ソファの上に寝転がると睡魔が襲ってきた。

腰の拳銃と装備品が身体にこつこつと当たっているのだが、それもあまり気にならないほど疲れていた。それでもこのまま寝込んで

しまえば、目覚めた時には体のあちこちが酷く痛むだろうから、ぼく残った意思を振り絞って身を起こした。

隣の寝室に向かい、手早く身に着けたものを外して下着だけの姿になると、45オートを片手にベッドに向かった。倒れ込むようにしてベッドに横になり、枕の横に拳銃を置いた。

疲れていた。身体ではなく、精神的にまいっていた。能力の使い過ぎなのだろう。

他人の心を覗き、そして自分の意思に従えさせる事の出来るぼく
の能力は、いわゆる　テレパシー　と呼ばれる超能力である。

それを使えばそれなりに、ストレスはどんどん溜まっていくのだ。
もつともぼくの能力はそれだけでは無かったのだが……。

六年前、　デーモン　と呼ばれる存在が世界に現われた時に、いきなりぼくの中でこの能力が発露した。同じ頃、そんな人間が世界中で出現したらしい。　デーモン　が異世界から現われた影響で、
そう言う　能力者　が生まれたのだ。

最初の頃はこの能力を制御できず、ぼくは発狂しそうになった。
四六時中他人の思考がぼくの脳に侵入してきて、ぼくの自我は壊れかけたのだ。

より強い感情がぼくの感情を飲み込み、暗い情熱がぼくの心を追いつめた。他人の思考と感情が、ぼくの思考と感情を奪っていった。
ぼくは自分の感情を失っていった。

ぼくの高校生活は惨めな病院暮らしで終わった。大検に受かったのは僥倖と言えるだろう。それでもその三年で、ぼくは自分の能力

を制御する方法を覚えた。そして何とか大学に入学し、普通の学生生活を送れるようになった。

同じ様な症状で入院していた人間の中で、十人に一人の生還率だったらしい。多くの能力者が発狂し、自殺したらしい。ぼくにはそんな人たちの記憶は無かったが……。

とにかくこの能力がある為にぼくはハンターになった。いや、なれたのだろうか？

家族をそろって失った二年前のあの日、水城がぼくの前に現われたのだ。ぼくを自分の事務所にスカウトする為に……。

結局ぼくは水城と一緒に働く事になった。家族をすべて デーモン に奪われたからと言う訳じゃなかった。それよりも、忌まわしい能力の使い道が出来た事が嬉しかったのだ。ぼくの能力を必要だと言われたからだった。

だが、ぼくは水城の性格が好きになれない。ぼくの能力をもつてしても彼の心が読めないからだけじゃない。いや

そうなのかも知れない。他人の心が簡単に覗けるようになって、自分に悪意を持つ者を徹底的に避けて生きてきたのだ。自分を傷つける者、自分を嫌う者はすべて自分の近くから排除しようとしてきたのだ。ぼくはいつの間にかそんな生き方を続けてきた。

でも、ぼくが水城を本当に信頼出来ないのは、時折見せるあの冷たい眼差しの所為であるのも間違いない。まるで道具のようにぼくたちを使う事も……。

疲れているのにこんな事を考えると眠気が醒めてしまう。

さあ、もう寝よう。明日は早くに目覚めなければならぬのだから……。

そう思いながらも、精神的に疲れ切っている所為なのか簡単に眠れそうになかった。そんな時はつい、さまざまな疑問が浮かび上がってきてしまう。

デーモン は何処からやってきたのだろうか？ それに デーモン とは一体何なのだろう？ そんな答えの出ない事を考えてしまった。

デーモン と呼ばれる生命体は六年前のある日、突如としてその存在を明らかにした。十三柱の デーモン・ロード 魔神王 と呼ばれる強大な存在が、その日全人類に自らの力と存在を見せつけ、そして正式に宣戦布告したのだ。彼らは時空の彼方からやって来た。多くの伝説と神話の世界から、自らの眷属と従者と共に世界中に降り立ったのだ。

彼ら デーモン・ロード は肉体を持たない生命体だ。いや、彼らの眷属たる上位の デーモン はすべて精神体もしくはエネルギー体である。それ故に人間の肉体に憑依するか、この次元に属する肉体 を創り出す事によって存在できると言われている。それが真実なのかはわからない。ただ、『エイリークの書』にそう説明されているだけだ。

『エイリークの書』は デーモン について記された記録の事を指し、膨大なデータが保管されているデータベースの事を言う。パスワードを知る人間なら、それをインターネットで誰でも閲覧できる

システムだ。

何故それを『エイリークの書』と呼ぶのか？ それは初めて人類の手で倒された 魔神王、デーモン・ロード と呼ばれている存在の 一柱、 剣の魔神王エイリーク がいまわの際で漏らした情報だからだと言われる。

はつきり言って眉唾な話であるとはくは思っている。

エイリーク が滅んだのは四年前、 エイリーク討伐隊 がそれを成した。千人を超える人類の英雄達が、己が命を掛けて魔神王の居城に攻め込み、そしてあまたの デーモン を滅ぼし、デーモン・ランド に変えられてしまったその領地を奪回したのだ。それはかつて旭川市と呼ばれていた、北海道のほぼ中心に位置していた所だった。

それは人類にとって最初で、そして最後の勝利だった。

今となつては、それが本当に人間が勝利した証とは思えないのだが……。

それ以前、各国の デーモン・ランド に、それを統べる デーモン・ロード に対して、各国の軍隊が立ち向かっていったのだが、その攻撃はすべて一蹴された。

その戦力の多数を占めていた最新鋭の兵器は、彼らには何も通じなかった。その運用をほとんど機械とコンピューターに頼っていたので、デーモンの魔力によってそれが狂ってしまったのは、ただの鉄くずに過ぎない事を、人類は忘れていたのだ。

エイリーク討伐隊 は、その戦力のほとんどを単純で原始的な銃火器に頼っていたのだが、それ故に デーモン の魔力の干渉を受けずに機能したのだ。彼らもこの次元に存在する限り、銃弾や刃物と言った物理的な攻撃を受けて、滅びを迎える肉体と言うものを捨てる事が出来なかったからだ。

それ以後、彼らの領土である デーモン・ランド に侵入しない限り、彼らが人類に戦いを挑む事も無くなった。人類もその領地に再び侵入する事も無くなった。それは『触らぬ神に祟りなし』と言う言葉を実践しているだけの話であると思う。

そしてぼくたち人類と、侵略者である デーモン との、条約なき不可侵状態が続いている。魔神王達は生き残りの人間に対して、特に興味を持っていないようだった。それに デーモン・ランド 以外の土地にも、まったく執着は無いのだった。

しかし、デーモン・ロード 自身が新たななる侵略を停滞させているとは言え、時空間を繋ぐ ゲート は何処にでもその存在を顯わし、デーモン と呼ばれる『絶対敵』は次々と現われるのだ。

もうこの地球上で、本当に安全な場所など無くなってしまったのだ。

そしてぼくたちのような、デーモン を駆逐する為の職業が生まれた。デーモン と戦い、それを狩る者たち。通称 デーモン・ハンター と呼ばれる存在である。

デーモン・ロード の降臨以来、国家として機能しない現在の政府は、警察や自衛隊だけでは デーモン に対応し切れない事を認識し、民間のハンター制度を取り入れた。そして一般に銃器の所

持を許可し、それを護身用とする事を認めた。それは、自分の身は自分で守れと、誰も守ってはくれないと言う事なのだ。

そしてデーモン・ハンター資格を受ける者は一気に増加した。

混乱した現在の経済状況の中で、誰もがその高額な報酬に惹かれるが、常に危険を伴う職業でもある。とは言え危険の少ない仕事を選べば、もちろん報酬は小さなものになる。

例えば、オークやゴブリンと言ったレッサー・デーモン 小鬼とか呼ばれる亜人類デミ・ヒューマンの一種 を山間で待ち伏せたりして射殺する、いわゆる『駆除』業務はその際たるものである。下顎を切り取ってそれを提出すると、一匹あたり1万円から3万円の手当てが支給されるのだ。危険は少ないが、労力も大きい。

しかし、ばくたちのような 擬装者 を追う者は、報酬も大きい事が多いが、危険も非常に大きい。オークを追いかけるのとは訳が違う。

擬装者 と呼ばれる デーモン の多くは、人間と同等、もしくはそれ以上の知性を有している場合が多い。人間の姿を装い、さらにその社会の中に解けこんでいるのだから、当たり前前の事である。そしてその正体の多数を、 闇の種族 と呼ばれる者たちが占めている。 擬装者 イコール 闇の種族 と言っても良いだろう。

もちろん、 闇の種族 以外の 擬装者 も存在する。魔神クラスの上級デーモンがそうだ。もっともそのクラスの デーモン ならば、人間を依代として召還しなければならぬので、そう見かける存在では無いが……。

だから多くの 擬装者 は、概ね 闇の種族 と言えるだろう。

ダーク・レイス 闇の種族 は人間の肉体や精神を糧とする存在の総称である。ヴァンパイアとか悪鬼羅刹と一般には呼ばれている不死の人類。いや、もともとは人間として生きていただろう存在。

彼ら 闇の種族 は、デーモン と言う存在に含まれてはいるが、実際には デーモン が出現する遙か昔から、この地上に存在していたと言われる。世界中に残っている鬼や吸血鬼の伝説がそれを裏付けている。その元をたどっていけば、人類が誕生したばかりの時代にまで遡れるらしい。

つまり、 闇の種族 の祖先は人類と共に生まれたとされるのだ。そして今まで人間の中でそれは存在し、その姿をはつきりと顕わす事無く、自らを偽装しながら生き延びてきたのだ。

それが、デーモン が異界の門をくぐり抜けてきた後、彼らは暗黒の時代以来、密かに隠してきたその存在を顕わにしたのだ。ある意味どさくさに紛れてだろう。そして今では誰もが、忌まわしきその存在を疑う事は無い。恐ろしいその 闇の種族 が、自分の隣人である事に気づく者は少ないが……。

ぼく達の相手はそう言った 擬装者 がほとんどである。それはぼくらが持っている能力の御陰だと言える。能力を持たぬハンターには、彼らを見分ける事も追跡する事も出来ないのだから、依頼のほとんどがぼくらの事務所にやって来る。

レッサー・デーモンなどより危険な獲物ではあるが、それでも人的被害の大きいこの獲物を狩る事は、ある意味ぼくのヒロイズムを刺激している。もちろん、報酬の大きさも魅力ではあるのだ。被害者の家族からの依頼が多いデーモン・ケースは、その被害が大きけ

れば大きいほど、高額な成功報酬となる。

それに、人間の形をした デーモン を殺すのは、何故だかばくにとつて非常にスリリングな快感をもたらすのだ。それはある意味、危険な快感なのかもしれない。

ぼくはこの仕事が好きだと思う。殺戮する喜びさえも感じている。闇の中で生きている存在を抹殺するのに、何の躊躇いも、禁忌も持てなかった。憐れに命乞いをする、まだ『生まれたばかり』のヴァンパイアの若者の頭蓋骨を、ぼくは笑いながら吹き飛ばす事も出来た。

彼がまだ幼い少女を何人も、欲望のままに犯しては殺していたからだった。

ぼくは 闇の種族 ほど残虐で非道な デーモン はいないと思っている。魔獣やレッサー・デーモンは、人間を食餌と思っているので、いたぶりながら殺す事は無い。ただ捉えて、それを貪るだけだ。それに魔神などと言うある意味神に近い存在は、どうせぼくらにはどうする事もできないし、そう言った存在を呼び出すのは結局人間なのだ。悪いのはそんな人間だと思う。

しかし、元来人間だった 闇の種族 の犯した事件のほとんどは、無残で忌まわしいものである。被害者の多くはただ殺されているだけだった。それは彼らが、人間の血や肉体だけを糧にしている訳ではない証拠だった。被害者の苦痛や恐怖の感情を喰らっているのである。それを彼らは『魂の食餌』と呼んでいた。

彼らは悪魔のような存在になってしまったから、そのようなおぞましい心を持つようになったのだろうか？ それとも人間であるか

らこそ、その心に恐るべき闇を持っているのだろうか？

ぼくはそれを考える事が嫌だ。何故ならぼくはその答えを知っている。

ぼくは人間の心がどのように歪み、擦じれてしまっているのかわかっている。誰もが心の奥に、悪魔の闇を閉じ込めているのだ。

そしてぼくは認めている。ぼくの心の中にもその闇が存在している事を。

二 章

朝一の講義が終わると、ぼくは赤く充血した目をこすりながら講堂を出た。結局夜明け近くまで眠れなかったぼくは、何とか遅刻寸前にここまでやってきたが、退屈な講義と単調な教授の声の為に睡眠に勝てなかったのだ。

午後の講義は単位が足りているので、ぼくはそのまま大学から出て行った。車は指定の駐車場に停めたまま、歩いて事務所に向かった。とにかく一休みしたかったのだ。

事務所のビルは、大学の正門から歩いて五分ほどの所にある。水城の持ちビルで、2階のワンフロアーすべてを事務所と自宅にしているのだ。仮眠室などいくらでも余っているのだ。

途中のコンビニで弁当や飲み物などを買い込んで、ぼくはその6階建てのビルの前に立った。白っぽいグレーのタイルを貼った外壁の、あまり目立たない建物で、1階は喫茶店と小さな旅行代理店のオフィスがテナントとして入っており、地下には二件の飲み屋が入っている。3階から上は賃貸マンションになっているが、住人はほとんどいない。

ぼくは正面のガラスのドアを押し開け、エレベーター・ホールの横にある薄暗い階段を上がっていった。2階に向かうのにエレベーターを待つ必要は無いのだ。

階段を上がり切ると、鉄製の扉が閉まっていた。防火扉のように重く、ぶ厚い鉄製の扉である。ポケットのキーホルダーを取り出し、そのノブの上にある鍵穴にキーを差し込んでロックを解除した。

重い扉の向こうは一本道の廊下だった。その両側の壁に幾つかの扉があった。

ぼくは左側にあるエレベーターの横の、一番大きな両開きの扉を開けて、事務所の中に入って行った。

事務所は三十畳ほどの広さを持つ、豪華な、ホテルのリビングのような部屋だった。普通のオフィスとはまったく似つかない、一見してデスクやファイル・キャビネットなど見当らない、事務所とは思えない部屋である。いや、もともとここはオフィスの機能など求められていないのだ。言うなればここはぼくらの溜まり場なのだ。

明かりは灯っていたが、そこには誰も居なかった。水城も何処かに出掛けているのだろう。

ぼくは大きな黒檀のテーブルの上に、買ってきた食物の入ったビニール袋を放り出し、高価なソファの上に寝転がった。そのまま眠ろうと思ったが、腹が音を立てて抗議しているのでこのままでは寝付けない事がわかった。

ぼくはビニール袋の中から弁当とウーロン茶のペットボトルを取り出して、取りあえず腹ごしらえをしてから、仮眠室のベッドでゆっくりと睡眠を取る事に決めた。その方が風邪を引く恐れも誰かに起こされる心配も無く、ゆっくりと眠れるはずだ。

ぼくは数分で弁当をたいらげて、その残骸を高価なテーブルの上に残しながら、隣の仮眠室へ向かう扉に手を掛けた。

その時、扉が勢い良く開き、オフィスに誰かが入ってきた。
全身を黒っぽい服に身を包んだ小柄な金髪の少女　ルクレツィ
アだった。

レースやフリルついたの白いブラウス、銀系の刺繍の入った裾の
広い黒いスカートにリボン・ネクタイ、やたらと目立つそのファッ
ションは相変わらずである。ゴシック・ロリータとか言うファッシ
ョンらしいが、ぼくにして見たら、ちよつと奇妙に見えるものだっ
た。ビジュアル系のアーティストならばステージでの衣装だと思え
ば良いのだが、彼女はぼくと同じ大学生で、しかも普段着としてそ
んな格好をしているのだ。

しかし、この少女にその格好はあまりにも似合っているので、一
緒に人の目につく場所に行かない限りは容認できた。

柔らかく波うつ、濃い金色の髪と鳶色の瞳、そして細く小柄なそ
の身体が、その服装によって独特な愛らしさと美しさを醸し出して
いるのは確かなのだ。

「あら、ひさしぶりじゃない？　祐騎が事務所に顔出すのは」

ルクレツィアはそう言いながら後ろ手に扉を閉めた。ぼくはこれ
で睡眠への未練を断ち切らなければならない事を悟った。溜め息を
つきながらぼくはソファに戻る。

「そう言うなよ。ぼくだってここ数日間忙しかったんだ。水城に

夜中までこき使われて、寝不足の毎日なんだからな」

ルクレツィアはぼくの向かいのソファに向かいゆつくりと歩いた。そしてその背もたれに右手を乗せて立ち、じつとぼくの目を見つめた。

「そんな事は言い訳にならないわ。昼間でも時間はあるじゃない今みたいだね」

ルクレツィアは怒っている訳でも嫌味を言っている訳でも無かった。ただ思った事をそのまま口に出しているだけなのだ。ぼくの前で心の中を隠して置ける訳は無いから、それは間違いの無い事だ。思考と言葉がこうも一致する人間は珍しい。だからこそぼくはこの少女が好きなのだ。

「まあ、そう言えばそうだよな。でも、ルクレツィアだってここには来てなかったろ？」

「それはわたしだって学生だもの、そうそう昼間には来ないわ。祐騎と違って講義をさぼったりしないもの」

そう言つてルクレツィアは愛らしい笑顔を見せた。

絵^{えれな}伶奈・ルクレツィア・高原。それが彼女の名前だ。

イタリアと東欧の 何処の国か名前は忘れた 血を持つ父親と、

日本人とロシアの混血の母をから生まれたらしく、外見上は日本人から程遠い容姿を持っている。陶器のような滑らかな白い肌、人形のように整った鼻梁、ぱつちりとした大きな鳶色の瞳を持ち、その華奢なスタイルと相まって、十九歳と言う年齢より五歳も幼く見える、非常に愛らしい美少女であった。すくなくともその外見は……。

彼女も水城がスカウトした能力者である。この事務所の同僚でばくの仲間だ。

サイコメトリーと一般に呼ばれる能力を持ち、更に？共感？（シンパシー）の能力を多少持つ。ルクレツィアはぼくたちの目であり、捜査の要であるのだ。実戦の場ではあまり期待は出来ないが……。

まあ、どちらにしろルクレツィアが銃を持って デーモン 相手に戦う事など無いだろう。そんな事は考えたくない。それに、ルクレツィアはまだ、正式なハンター資格を持っていないのだ。デーモンハンターの年齢制限が二十歳からだからである。

もつとも、喻え彼女が正式にハンター資格を取得したとしても、ぼくや事務所の他の人間も、ルクレツィアを実戦の場に送り出すことは無いだろう。

ぼくはわざとらしい溜め息を吐き、長い前髪をかき上げながら「ぼくだってさぼりたくてさぼっている訳じゃないよ」と、訴えかけるようにルクレツィアの顔を見上げた。

「水城の人使いが荒すぎるのさ」

ぼくのその言い訳を、ルクレツィアはまったく意に介さない様子で、ぼくの隣に軽やかに腰を下ろした。そして愛くるしい微笑みを絶やさずにぼくを見つけた。

「そんな事はどうでもいいの。問題はこの一週間、あなたがわたしに会いに来なかったって言う事。それだけのよ。」

「だいたい、会おうと言う気持ちがあれば、仕事をしながらだってわたしと会えるでしょう？ どうせ車の中で『獲物』を見てるだけだったんだから」

「そ、それはそうだけど でも、いきなり『獲物』を狩る事になったら、ルクレツィアはどうするのさ？ まさかそんな所に連れては行けないだろ？」

ルクレツィアはぼくの手をそつと握り、挑むように顔をぼくに近づけた。

「いいじゃない、わたしもそこまで連れて行けば。圭も祐騎もわたしの事を何だと思っているのよ。わたしだってこの事務所のメンバーなんですからね！ みんなしてわたしの事を仲間外れにしているんでしょ？ まだわたしに資格が無いからって」

「そんな事じゃないって！ 別にぼくらはルクレツィアの事をそんな風に考えていないよ。ただ、『獲物』を、擬装者を狩るのはぼくか水城の仕事だから、他の誰も連れて行かないだけだよ。木戸のおじさんだって戦闘に参加する事が無いじゃないか」

「それはそうだけど」

ルクレツィアはそう言って、形良い艶やかな、ピンク色の唇を軽く

噛み締めた。

「でも 祐騎、あなたがわたしを避けるのはどうしてなの？」

ルクレツィアの問いに、ぼくは一瞬なんの事だと思った。この数日、彼女に会っていないのだから、無視する事も無いはずだ。

だが、すぐにその答えがわかった。彼女の思考がぼくの頭に次々と流れ込んでいたからだ。ぼくは自分でも忘れていたのだが、彼女にはそうでは無かったらしい。

ルクレツィアとは、大学の構内で二日前に遭遇していたのだ。

大学のカフェで、彼女は数人の友人と何かお喋りをしていたのだが、ぼくはそれを見て回れ右してその場を去って行ったのだ。ルクレツィアには気づかれていないと思ったのだが、どうもそうでは無かったらしい。

「いや、それはその」

ぼくは返答に困ってしまった。

ぼくは、彼女が周囲の視線と話題の中心にいたのを知っていた。それは勿論、ルクレツィアの華やかな、愛らしい容姿の所為でもあっただろう。しかし、それ以上にその格好 今着ているよりも派手なゴシック・ロリータ・ファッションが、人々の好奇の眼差しを

集めていたのをぼくはわかってた。

「わたしがこんな服を着ていたからでしょう？」

小さな唇を尖らせて、ルクレツィアはぼくを睨みつけていた。ばれているのだ。

「だって あの場合の雰囲気にはさあ……」

ぼくは言っではいけない事を思わず口にしないように、色々と考えながら言い訳を探した。しかし、それは通じないだろう。

ぼくは彼女に嘘が吐けない。絶対に見破られてしまう。ぼくのようなテレパシー能力が、ぼく相手に限って、彼女にも身についているかのように……。

「わたしの事が恥ずかしいのね？ そうだったんでしょ？」

「いや、そんな事は無いよ。ただ、ぼくは目立つのが嫌いだからさ

」

「何を言っているのよ。祐騎はいつでも目立っているじゃない？」

ルクレツィアのその言葉に、何故か自慢気な、からかうような口調を感じた。彼女の脳裏には、女の子が笑いながらぼくの話をしている場面が現われていた。

「それとも、他の女の子に騒がれなくなるのが嫌なのかな？」

ああ、解った。ルクレツィアはぼくがこの容姿の為に、一部の女

の子に騒がれているのが気に喰わないのだ。でも、それはぼくの所為じゃ無い。ぼくは望んでこんな顔に生まれたかった訳じゃないのだ。

ぼくは自分の容姿が好きではない。昔からこの顔でからかわれていた所為もあるが、それは根強いコンプレックスとなっている。

「そんなのぼくの所為じゃないだろう？」

ぼくはむっつりとしてそう言った。

ぼくは女顔である。背もあまり高くは無いし、体格も良くはない。しかも肌は日に焼けない質なのか真っ白だ。もっともそれは、太陽の下で過ごす健康的な生活を送っていない所為もあるが。から、ぱつと見は女の子。少なくともボーイッシュな、と言う形容詞がついていて欲しいものだ。に間違えられる程だ。

それが一部の趣味の悪い女の子の心を捕らえるらしい。少なくともルクレツィアはそう考えている。まったく困ったものだ。

「勿論あなたの所為じゃ無いわ。でも、だからと言って手を振っていたわたしを、あんな風に無視する事はないんじゃないかしら？」

「いや、それはそうだけど。誰もぼく達の事を知らないんだろ？」

「何で？ 知っているわよ。少なくともわたしのサークルの人はね」

それじゃ、ぼくはこの不思議な格好をした少女とつきあっている、あの時の場所にいた人間は知っていたのか？

「何だ、それじゃ別に逃げる必要なかったな」ぼくはぼそりと呟いた。

「やっぱり逃げたのね！ まったくもう！ そんなにわたしの服が気に入らないの？ そんなに恥ずかしいの？」

ルクレツィアはぶんぶん怒りながらそう言った。

ここでお為ごかしを言っても仕方が無いので、ぼくははっきりと言った。

「そりゃ、そんな格好で他人のいる所には行きたくないのは当たり前だろう？」

「何ですって！ あんたそんな事本気で言ってるの？ この服はわたしの為にあるような物じゃない。こんなにこの服が似合う女の子はそういないわよ！」

しまった。どうやらぼくは、ルクレツィアの逆鱗に触れてしまった様だ。しかし、怒っているながらもルクレツィアの顔は愛らしいと思えた。思わず微笑が漏れてしまう。

「なに笑ってるのよ！」

自分では本気で怒っているんだ、と見せたかったのかも知れないが、ルクレツィアの心の中では、サークルの人間にぼくの事を話した理由が駆け巡っていた。何とかそれを隠そうと怒っているのだが、ぼくにはそれを、開かれた本を読むように知る事が出来るのだ。

彼女の所属するサークルの中の、何人かの少女がぼくの事を知っていて、ちょっとした興味を示していたからなのだとぼくはわかってしまった。それが独占欲の強いルクレツィアには我慢できなかったのだ。

「まあいいよ。確かにルクレツィアにその服は似合っているんだから……。ただ、ぼくと二人きりの時だけにしなよ。せめて大学に着ていくのは、もう少しおとなしいものにしてくれよ。それで妥協しようじゃないか」

ぼくはそう言って、ルクレツィアに右手を差し出した。これで仲直りだ。

ルクレツィアは訝しそうにぼくの右手と目を交互に見て、おずおずと右手を差し出した。

ぼくはその手を強引に引き寄せ、両手でそれを包んだ。

「わかってくれればいいのよ」

ルクレツィアは強がった素振りでそう言った。

一瞬の間があったが、照れ隠しにルクレツィアはすこしはしゃいだ様子で、

「それで『獲物』は仕留めたの？」と、質問してきた。

「昨日の夜 いや、性格には今日の明け方かな。ルクレツィアのサイコメトリーで見つけたあの男だよ。やっぱり 闇の種族 だったよ」

「やっぱりヴァンパイアだったのね。わたしはそこまで確認できなかったけど、圭が銀の弾丸をあの女に注文していたから、きっとそうだったわ」

「あの女　ああ、エカテリーナの事かい？」

ぼくは銀色に近い美しい金髪で、顔の左側を隠した長身の美女の姿を思い浮かべた。水城の知り合いらしく、一般には市販されていない特殊な装備を、何処からか調達してくる武器商人のような女だった。？エカテリーナ？と言うのは、本当の名前では無いらしいが。

「そうよ、あのいけ好かない魔女よ」

ルクレツィアは辛辣にその女を形容した。

「魔女？　あの人がかい？」

ぼくはそう言ったルクレツィアの顔を見た。

ルクレツィアは嫌悪を隠そうともせず、

「あの女は絶対に普通の女では無いわ。だってあの女の持ち物を触っても、何も　視え　無かったもの。絶対におかしいわ」と、吐き捨てるように言った。

確かにそれはおかしい。ルクレツィアのサイコメトリーで何も見えない事などあり得ない。そう言えば、今まで特に意識していなかったが、ぼくはあの女の心を読む事が出来なかった事を思い出した。まるで水城に対しているように、心の障壁が存在していたのに気づいた。もっとも、全力でその能力を使おうとした訳では無いが。

ただ、ぼくはルクレツィアが何故、彼女を探るような真似をしたのか疑問だった。

確かに何か気になるものを持っている女だったが、あまり他人の事を気にしないぼくは、特別に気にしなかったのだ。まあ、どうでも良い存在だった。

ああ、でもルクレツィアには彼女の存在がただ目障りだったのだろう。彼女が妖しい魅力を持った大人の女だったからだと思う。

ぼくにはよく理解出来ないのだが、それが女の性と言うもののなのだろう。取りあえずそう思う事にして、ぼくはルクレツィアとの『接触』を絶った。これ以上、ルクレツィアの心に留まる事が嫌だったのだ。女心の奥を覗きたくなかった。

「あの女が魔力を持っている事に間違いはないわ」

ルクレツィアはぼくが『接触』を絶った事に気づかず、そう続けた。愛らしい口元が歪んでいた。

「どうしてそう思うの？」

ぼくはさり気なく視線を逸らしながら呟いた。

「だって、圭がそう言っていたもの。魔界の魔術 を使える数少ない魔術師だって」

「魔界の魔術 だって？ デーモン・スクリーム の事かい？ そりゃ、確かに珍しいな。デーモンの魔術 って言われている魔術だろう？ 魔神 にしか使えない魔術だと思っていたけど、

人間の魔術師でもそんなもの使えるんだな」

ぼくは少なからず驚いた。黒魔術と呼ばれている、一般の人々にいや、その他の魔術師にも忌み嫌われている魔術だ。代償があまりにも大きい為、人間の使う魔術では無いといわれている。

それでは、ルクレツィアが色眼鏡で彼女の事を見るのも、ある意味仕方が無いのかも知れないと思った。

「そうか、そうなんだ。だからルクレツィアが何も視なくて、ぼくも何も読む事が出来なかったんだ。その魔術でエカテリーナは精神に防壁を創っていたんだな」

「きつとそうだと思うわ。なんで圭はあんな、えたいの知れない女とつき合っているのかしら？」

ルクレツィアの瞳に嫉妬じみた光が宿っているのに気づき、ぼくは『接触』を解いていて良かったと心から思った。そしてそんな風に、自分で能力を自由に制御できるようになっていて、本当に良かったと安堵していた。

ルクレツィアの心の中にも醜い感情がある事を、ぼくは認識しなくなかったのだ。それが人間の当たり前の姿だと知っている。でもぼくは、健全な精神を持っている目の前の美少女にも、心の奥底に闇を持っている事を認めるのが怖かった。このぼくがそんな甘い考えを持っているのを水城が知ったら、きつと冷たく笑われるだろう。

「まあ、仕方ないんじゃないか？」

ぼくは自分の考えをルクレツィアに気づかれないよう、何気ない

声でそう言った。

「水城には水城のつき合いだってあるだろうし、それにエカテリーナは普通じゃ手に入らないものを持って来てくれるんだ。大事な相手だろう？」

「そんな相手じゃないでしょう？ わたしはあの女の方がよっぽど擬装者 っぽいように見える時があるもの。まるで 闇の種族の 貴族（エルダー） みたいな感じがするわ」

そう言えばそんな雰囲気は彼女は持っていた。高慢さと倦怠感に身に纏った、美しくも淫靡なあの女の姿が脳裏に浮かんだ。それに深い闇を秘めた瞳と、微笑んでいてさえぞっとするようなその視線がぼくを落ち着かなくさせていたのを思い出す。

ルクレツィアの洞察力はぼくよりも遥かに優れているようだ。まだ二、三回しかエカテリーナと顔を会わせた事が無いのに、何度も会っているぼくが気づきもしない事を考えている。それともぼくがあまりにも無関心過ぎるのだろうか？

「まあ、本当にそんなものだったら、圭だってつき合いがある訳ないけどね？ 何て言っただってわたしたちの『獲物』と仲良く出来る訳ないしね」

ルクレツィアがそう言って微笑んだので、ぼくは漸くほっとした。

「それはそうだよ。それに彼女は昔からの知り合いだって、水城が言っていたよ。何か大きな仕事で仲間だったらいいよ」

「まあ、いいわ。祐騎ったら、あの女にまったく興味ないみたいだ

から」

嬉しそうにルクレツィアは微笑んで、ぼくの腕に自分のそれを絡みつかせた。

その時、いきなり事務所の扉が開き、水城が噂の美女と連れ立って入ってきた。そして件の美女はほんとルクレツィアを見ると、薄い唇を吊り上げて微笑んだ。

「何だ来ていたのか。今日は姿を見せないと思っていたんだけどな」

きざつたらしい仕草で、銀縁の眼鏡を右手の中指で押上げ、水城はカウンター 何と高級そうな人口大理石のカウンター・バーである の中に入った。エカテリーナは艶然と微笑んでぼく達を一瞥すると、カウンターのスツールに腰掛けた。

黒っぽいスーツ姿の伊達男は、カウンターの中の冷蔵庫からウオツカの壺を取り出して、一つのグラスに三分の一ほど注いだ。それにジンジャーエールを満たして氷をたっぷりといれて、その金色に泡立つ飲み物をカウンターのの上に置いた。

モスコミュールと呼ばれるカクテルを、エカテリーナは優雅なしぐさで手に取った。そしてぼくに向かって、

「あなた達もどう？」

と流暢な日本語で誘った。

黒いドレス姿の彼女はまさに 闇の貴族 のような美しさだった。

銀色に近いプラチナ・ブロンドの豊かな髪は、月の光を浴びると幻想的に輝いて、その美しさを際立たせるであろう。青白いほどに白いその肌も……。

まさにこの女は、闇の中で生きる者に思えた。それも特別なクラス。ぼくは何故だか、いつも長い髪に隠されている、左側の顔が気になっていた。

「これから警察にいつて営業して来る。最近続いている女子高生ばかり狙った殺人事件が、ついにデーモン・ケースに認定されたんだ。犯人の追跡と始末を請け負ってくるのさ」

水城はグラスの中身　ウォッカの混ざっていないジンジャーエール　を一気に飲み干して、一息ついた後にそう答えた。

ぼくはあまり大きくは報じられていない、一連の殺人事件を思い出した。十六歳から十八歳までの若い女の子ばかりを狙った殺人事件で、深夜に路上やクラブのトイレ、ましてや自分の部屋の中でもすでに十人の若い娘が犠牲になっているらしい。

それまでの報道では、一連の事件を繋げるものは無く、同一犯の犯行では無いと思っていた。しかし、それは密かに連続した事件である事を警察は知っていたのだらう。ただ、その手口　どうやって殺されていたのかは、まったく公表されていなかった　から、デーモン・ケースと呼ばれる『悪魔による犯行』と考えられていたので、その情報を発表していなかったのだらう。

そして今、デーモン・ケースである事を公表して、ハンターによる早期解決を望んだと言うのだ。もっとも、公表されているのはぼくたちと、もしくは同業のハンターだけであるに違いないが……。

「もう次の仕事なの？」

ルクレツィアは沈んだ声を出した。

「いいじゃないか。久しぶりに大口の公共発注だ。パブリック・オーダー 成功報酬で三千万だって言うんだぜ？まだうちで受注できるかわからないけどな。まあ、今回は指名で入った入札だから、前金は共通だろうし、残金は成果報酬だから俺たちが解決してしまえばいいんだ」

ぼくは昨夜の仕事が終わって疲れも取れないうちに、新しい、しかも大きな仕事を請けるのは気が進まなかったが、水城がこの依頼を蹴る事が無いだろうと確信していた。

「それはいいけど、前回の報酬はいつ入るんだよ？」

水城は肩を竦めながら、

「おいおい、昨夜の事だぜ？ 今月の末には入金するだろうから、ちゃんと振り込んでくよ。心配するなつて」

と言って、グラスをカウンター内のキッチンに置いた。そしておもむろに立ち上がり、

「それじゃあ俺は出るぞ」と告げる。

エカテリーナもその後が続いて行くこととしたが、急に振り返って、「ねえ、あなたこれから時間ある？ 良ければわたしと食事でもどう？」

と、ぼくに向かって微笑んだ。凄く淫らで魅力的な微笑みだった。魅了の魔力に溢れている瞳だった。

誘われるように思わず立ち上がりかけた時、

「悪いけど先約があるの」

と、凍りつくような冷たい声でルクレツィアが、ぼくの代わりにそう答えた。

「そう、それは残念ね。それじゃ、次の機会を待っているわ」

エカテリーナはルクレツィアに視線を向ける事無く、そう言って部屋を出た。

三 章

目が覚めると部屋の中には、カーテン越しでも感じる陽光が差し込んでいた。

ぼくは扉を開き、隣室の居間に出た。キッチンの方から何かフライパンで炒めている音と、香ばしいベーコンの焼ける匂いが漂ってきた。

ルクレツィアが朝食を作っているのだろ。ぼくは急に空腹を覚えた。

キッチンに顔を出し、ベーコンをカリカリに焼いているルクレツィアにおはようと告げると、彼女は大輪のひまわりのような笑顔を見せた。

「やっと起きたのね？ もう九時になるわよ」

ルクレツィアは、コットンの無地のシャツに細身のブルー・ジーンズと言うラフな格好をしていた。ぼくの家には常備している、大きなバッグの中にあつたものだろう。蜂蜜色の長い髪は、ゆつたりと頭の上で巻き上げられていた。

ぼくは居間に戻り、ソファの上に座るとテレビの画面を見た。ワイドショーが最近の事件をレポートしている。五人の少女を食い殺した十七歳の少年が捕まったらしい。

魔神王の侵略が止まった後も、こう言った凶悪で悪魔じみた犯罪は毎日のように起こっている。今の微妙なバランスで成り立っている平穏な世界 『デーモン・ランド』以外の地域では が、結局は砂上の楼閣にも似た幻の平和である事を、人類に重い知らせるかのように……。

数人のコメンテーターが述べる感想が噴飯ものだった。いまさら何を言っているのだろうか？ デーモン に憑依されるのは心が病んでいるからだって？ 心に闇を持っているのは特別な生い立ちの所為だって？

冗談ではない。誰にだって デーモン・シンドローム と呼ばれる デーモン の憑依は起こりうるのだ。それに心の闇を持たぬ人間など存在しない。

ぼくは愚かしいその発言に対して冷たい笑いを禁じえなかった。

それにしても人間が起こした残忍な犯罪を、すべて デーモン の仕業と決めつける最近のマスコミには閉口してしまう。本当にデーモン がその少年に憑依しているのなら、簡単に警察なんか逮捕される訳が無いだろう？ と、思う。

デーモン・シンドローム とマスコミが名づけたそれは、二つのパターンがあるのに、マスコミ自体はそれを区別しない。一つは本当に、精神寄生するタイプの デーモン が憑依した状態である。魔神と呼ばれている上級の デーモン の依代としてではなく、下

位の デーモン の無差別な肉体の乗っ取りだ。その場合、すでにその肉体は デーモン そのものに乗っ取られている為に、人間であつた時の意識は無くなってしまうている。

もう一つのパターンは、本人の意識はそのまま、 デーモン による何らかの影響を受け、精神だけ『悪魔化』してしまう事を言う。それは人間の本能的な攻撃性と、殺戮本能が表に顕われたに過ぎず、厳密に デーモン に変化した訳では無い。

デーモン・シンドローム を患ったほとんどの人間が後者のパターンに当てはまる。つまり、人間の意識がそう言った残虐な事件を引き起こすと言う事実。それをマスコミは意図的に封じているのだろうか？

デーモン・シンドローム に陥った者は、その存在を デーモン そのものと断定され、その場で射殺しても罪には問われない。人権など無くなってしまうのだ。喻え普通の犯罪者のように逮捕されたとしても、裁判無しで処刑されるだろう。

悪魔的なもの影響を受けたと言っても、そう言った事件を起こした人間の意識や記憶が無くなっている訳では無いので、犯行後の虚脱状態の彼らが逮捕されると、精神判定での異常さは見る事が出来ない。現代の悪魔憑きと呼ばれる デーモン・シンドローム は、そう言った人間を生かして置かない社会が、意図的に捻じ曲げた解釈をしているものだ。

ただ実際的には、彼らは心神喪失状態でそう言った凶行を行う訳では無いから、処罰を受けるのは仕方が無いだろう。しかし、加害

者の家族自身が、彼ら『発病者』を死刑にして貰いたがるのは嫌な話ではある。

もつとも加害者の家族にして見たら、その恐ろしくも凶悪な犯罪の動機が、自らの欲望に忠実な行動に過ぎない事、自分自身の考えや意思によってそれが行われた事を、認めたく無いのは仕方が無いのかもしれない。悪魔や悪霊に取りつかれてそう言った凶行を行う事になってしまったのだと、他人にも自分達にも認めさせたいのだ。

欺瞞ではあるが、誰も傷つかずに犯罪者を処理する画期的なシステムだと言える。

ルクレツィアがカフェオレを持ってきて、「熱いからね」と手渡してくれた。ぼくは自分の思考の中から戻り、「サンキュ」と呟いた。その温かさに救われるような気がした。

それからルクレツィアがテーブルの上に朝食の皿を並べ始めたので、ぼくもそれを手伝った。と言っても、ただ食器と料理の載った皿を運んだだけだ。

トーストにベーコンエッグ、インスタントのポタージュにラタトゥイユと言った食事を、ぼくはテレビの画面に向かいながらむさばった。

コマーシャルが挟まれ、ニュースが札幌市内で連続して起きている殺人事件のレポートに移った。俗に言う、連続吸血殺人と呼ばれるものだった。

この事件の最初の犯行は二ヶ月前に始まった。もっともその事件はずっと後になって、この一連の事件の一部だったと判断されたので、あまり大きくは報道されていない。闇の種族 によるありふれた通り魔殺人と判断されていたのだ。

しかし、事件が短い間に連続的に起こってしまい、その犯行の手口やもろもろの条件から、同一犯による殺人事件とあらためて判断されたのだ。

先日の事務所で水城が話していた、デーモン・ケースに認定されたと言う事件だった。

ぼくは今まで、これも シンドローム型 の事件であると思っていたので、まともに事件の内容も知ろうとしなかった。しかし、水城がこの事件を扱う事に決めれば、ぼくも多少の事は知っておかなければならないだろうと思い、思わずそのワイドショーのレポートに集中してしまった。

「これでしょう？ 今度の依頼になるの？」

ルクレツィアがトーストにバターを塗りながら訊いてきた。

「そうなるんじゃないか。ほら、正式にデーモン・ケースに認定されたってさ」

ぼくは画面に指差してそう言った。レポーターが演技過剰に喋っている。

「いやだわ。また被害者の死に際を『視る』事になるのね。今度のは本当に悲惨そうだし」

ルクレツィアが心底嫌そうな顔をしてそう呟いた。

「悲惨そう？ 吸血鬼に血を吸われているだけだろう？」

ぼくはスプを啜りながらそう言った。ヴァンパイアの犠牲者はそう苦しむ死に方をしない。反対に恍惚の表情を浮かべながら、この世のものとは思えぬ悦楽に浸るはずである。死んでいる遺体を見ると、肌は蒼ざめているのだが、ほとんどのそれは安らかな表情を浮かべている。吸血の行為で死にゆく者だけ……。

「最初の二人だけは、血を抜かれて失血死しているみたいだけど、その後は身体を切り刻む　　と言うより、引き裂かれてむさぼり喰

われているのよ。圭がそう言っていたわ。もしかしたら複数の犯行なのか、もしくは 貴族 クラスのヴァンパイアかもって言っていたわ。ほら、死体の後始末を従者にさせたのかも」

ルクレツィアが言わんとしている事は、はつきりとぼくにはわかっていた。つまり、そのヴァンパイアが『食餌』を終えた犠牲者の肉体を、従者である 獣人 に与えて始末させたと云うのだろう。

エルダーまたはダーク・ロードと呼ばれる、数百年を生きてきた 貴族 級のヴァンパイアには、必ずと言って良いほど 獣人 の従者が存在する。それがどうしてなのかは、研究者の一人がこう述べている。

『 闇のくちづけ によって人間から従者として創りだされたヴァンパイアは、やがてその存在も歳を経る事によって独立した マスター に変化し、新たな血統を創りあげる事になるので、 貴族 クラスのヴァンパイアにとっては永続的な主従関係を保つ事が出来なくなる。血縁上の上位者は、？親と子？の関係になるのだから、決して？主従？のそれでは無いのだ。』

かくして 貴族 たちは、長い年月も生きていける 仔 とは別の従者を必要としているのである。短い期間のものならば、レンフィールド と呼ばれる『闇に魅入られた』人間でも良いのだが、特殊な感応能力を持つとは言っても、しょせん レンフィールド は人間と言つ種であり、長い年月を主人と共に生きる事が出来ない。それで、不老不死とまではいかないが、人間の数倍の寿命を持つ

獸人 を従える 貴族 が多いのである』

だが、ルクレツィアの言った言葉に対し、ぼくには一つの疑問があった。

「でも、それなら死体なんて残っていないのが普通じゃないか？
あいつらの食欲なら、人間の一人や二人、骨ごと噛み砕いて丸のみだぜ。わざわざ喰い散らかした死体を置いて行くのも、後始末とは言えないし」

ルクレツィアもそれを怪訝に思っていたようだ。

わざわざ人目につくように、惨殺された死体を置いて行く事など、仮にも 貴族 と呼ばれるヴァンパイアが取る行動ではない。慎重に自分の存在を隠していたからこそ、彼らはエルダーと呼ばれる存在になるまで生き長らえているのだ。

近年はその存在について認識されてしまっているので、自身が闇の種族 と特定されるような愚かな行為をする者はいないだろう。だから今回の事件の被害者は、異常な状態で発見されていると言える。

それとも、人喰い鬼^{オীগ} か 屍食鬼^{グール} の仕業に見せかけようとしているのだろうか？ しかし、現在の警察の科学捜査技術はそんな事などで惑わされたりはしないはずだ。死体から一切の血液が抜けているならば、それはヴァンパイアの仕業と断定されてしまうだろう。

う。もつともそれが本当に正しいのかは、ぼくにもわからないが…。

「まあ、いずれそれもはつきりすると思うわ。どうせこの事案が持ち込まれたら、わたしがそれを『視る』事になるんだから」

ルクレツィアはそう言つて話を切り上げた。ぬるくなったカフェオレを、顔を顰めて飲み込んだ。

午前中の講義があると言つて、朝食のすぐ後にルクレツィアは出て行つた。こざつぱりした格好から、派手なフリルとレースの、白と黒の二色で固めたいつもの服装に着がえて。

ぼくは溜め息を堪えてその姿を見送つた。

キッチンで皿洗いや後片付けを終えると、自分も昼からの講義に出る為に家を出た。まだ十時を過ぎたばかりの時間だった。

ジーンズにティーシャツ、その上に麻のジャケットを羽織つた姿で、ぼくは歩いて大学に向かった。車を使わなかったのは、夕方から水城と一緒に夕食を取る約束をしていたからである。どうせ酒を飲まない水城が車を出すだろう。

涼しくなった心地よい風と、刺すように照りつける事の無くなった日差しが肌に感じられ、ぼくの気分を何と無く軽やかにしている。それは長らく続いた睡眠不足が、昨晚にやっと解消されたからなのかも知れない。

午前中に出歩くのは、久しぶりに楽しい気分だった。夜遅い時間に出歩く事の多い仕事なので、たまにしかこんな機会は無いからだろう。新鮮な気分になる。

それでも、また新たな仕事が舞い込んで来ると思うと、自然と溜め息が漏れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5603z/>

デーモンハンター 鬼の姫巫女

2011年12月21日22時46分発行